

胡堂賞

「生」と「食」

江口 万葉

時間があると私は本屋に行く。何の目的もなくただ文庫本の棚を歩く。題名だけを見て興味を抱いた本を手取る。どんな内容だろう、そんな期待を膨らませ、一度大きく深呼吸をし、真新しい空気を含んで表紙をめくる。本に出会う上で私には題名以外の情報は不要だ。友人にはあまり理解してもらえないが、これがとても幸せなのだ。

いつものように本棚の冒険を楽しんでいた私の目に飛び込んできたのが「ライオンのおやつ」という本である。今までにないほどの強い衝撃と、怖さ・獰猛さの象徴「ライオン」とやさしさの象徴「おやつ」の組み合わせに好奇心が暴れだしたのを感じた。中を一度も見ずに購入し、帰宅後、お風呂を済ませてその本と向き合った。何にも追われることなくゆったりとした時間の中で清らかに向き合わなければならないと感じたからだ。

あれほど号泣した本は初めてだった。

主人公は33歳という若さでステージⅢの癌を宣告された海野雫。今までいい子で生きてきた彼女が「クリーム」のしっかり詰まったチョココロネみたいにちゃんと最後まで生きる」ために瀬戸内のレモン島にあるライオンの家というホスピスにやってくることから物語は始まる。ライオンの家ではゲストと呼ばれる入居者がもう一度食べたい思い出のおやつをリクエストでき、週に一回抽選で選ばれた一人の希望にこたえる形で再現する。何をリクエストしようか悩む雫がマドンナと呼ばれる施設の代表や、個性豊かながらそれぞれに抱えるものがある様々なゲストと出会う中で穏やかに幸せな最期を迎えるまでの日々が淡々と、しかし優しく彩り豊かに描かれている。登場人物の一人一人の発言に重みがあり、それぞれの人生を垣間見たような感覚がした。

「何が大事って、今を生きている、ってことなの。自分の体で感じることで見て感動したり、触ったり、匂いを感じたり、舌で味わったり。」

雫の亡き母の言葉である。生きているということを意識せずに普段生きてい

る私たち人間にとって最も当たり前だが、生というものの神髄を突いたような言葉にはっとさせられた。五感があり、感情に左右されるのは生きている証で、ありがたいことだと痛感した。

そして肝心の「ライオン」の意味である。温かい空間であるホスピスがなぜライオンという名前でなければならないのか。ここでは敢えて述べることはしない。読破して、雫の生き方に感情を動かされて初めてライオンがライオンたる意味を理解できると思う。何といっても私たちは生きているのだから、感覚と感情で感じてほしい。

この「ライオンのおやつ」を通して作者は何を伝えたかったのだろうか。そう考えては何度も読み返した。たどり着いた結論は「食」つまり「食べる」ことの大切さと「食べる」ことで得られる幸福感だ。本作中にはテーマとなるおやつは勿論、多種類のおかずや料理、ワインが何度も登場する。それらは全て誰かが丹精込めて作ったものである。ある人にとっては心の枷を取り払って素直にしてくれるもので、またある人にとっては幸せな記憶を呼び起こしてくれるもので、最期を迎える側も、見送る側も自分たちらしいお別れをするうえで重要な役割を果たしている。「料理は、子供の遊びであると同時に大人の喜びだ。そして、慎重になされる料理は愛の行為である。」アメリカのレストラン評論家でフードジャーナリストのクレイグ・クレイボーンは述べたそうだ。何と的確な表現だろう。雫をはじめとする入居者は間違いなく温かい愛に包まれて旅立つことができるのだ。

私の祖母も現在ステージⅢの癌を抱えている。雫と同じである。離れて暮らしている私は直接何かをしてあげることができない。そんな無力感に苛まれていた私に母は料理を送ってあげればいいじゃないのと提案してくれた。幼いころから祖母はお正月などたくさん料理を送ってくれたり、私がいじめで学校に通えなくなった際には私と母の体調を気遣い、会いに来て、しばらく滞在して料理をしてくれたりした。次はお返しする番だ。今までのありがとうの気持ちとまだまだ長生きしてほしいという思いを込めて作った料理を祖母は泣いて喜んだ。癌の宣告から3年弱。祖母はまだまだ元気だ。

現代人は「食」を大切にできているだろうか。ダイエットのための欠食や、孤食や個食、ながら食といった問題が叫ばれている。私たちの食事は身近

な誰かや見知らぬ誰かに支えられている。世界を見ると、食事をいただくことができるのは決して当たり前ではないことに気付く。何気ない日常の中のありふれた光景である食事。そのありがたさをかみしめつつ、生きていることに感謝して感情豊かに私は今日もおいしくご飯を味わいたい。

図書名 ライオンのおやつ
著者名 小川糸

審査員講評

胡堂賞感想文について

書籍との邂逅が、生き方をも蕩揺するということ
を再認識させられる作品でした。「生」を「食」
から感得する「幸福感」というフィルターで捉え
直す江口さんの意見には考えさせられます。自身
に投影された主人公の想いが、豊かな「生」へと
昇華される、そんな心温まる感想文でした。

教育長賞

『猫のお告げは樹の下で』を読んで

鹿島朝日高等学校 2年 立川 誌乃

この本は、雑誌にオススメの本として紹介されていたので以前から認知していた。偶然本屋で見かけた時、表紙の柔らかな色使いや温かみのあるミニチュアの人々の絵にひかれ自然と手が伸びたのが読み始めたきっかけだ。

開いてみると失恋、親子関係、学校生活などに悩みを抱える男女7人が、ふと立ち寄った神社で、ふいに現れる不思議な猫からお告げをもらい変化していく様子を7つの物語として描いている連作短編集であった。私は、この中で特に「ポイント」という作品が印象に残った。なりたいたいものが分からない就活生、慎がもらったお告げやバイトの先輩でギター奏者を目指している竜三に影響され、なりたいたいものを見つけるまでの過程が描かれている。

その中で、すぐ付箋を貼ってしまったほどに心に響く言葉があった。

「まず、知るべきは、目的地ではない。現在地だったんだ——。」

この言葉は、慎の心境が大きく変化する場面的一部分に書かれていた。文中のこのフレーズを見た時、私はハッとさせられた。目標を立て行動することの重要さは、言われなくても理解できるが、目標を立てることを優先し現在地をおろそかにすると「目的地」言い換えれば「目標の達成」に到達するまで遠回りになるということに気がついたからだ。

すると、私は自分自身、今このような状態なのではないだろうか、と自分に問い返したくなった。実際「試験結果を上げるには」と返される試験の点数に縛られていたからだ。試験は、特定の集団の中での自分の立ち位置を客観的に示してくれる。さらに、試験を行うまでの試験勉強が適切であったかを試験結果を見て、私達は評価できる。すなわち、自分の現在地を知るとても有効な数少ない手段の一つなのだ。

しかし、私が試験結果の中で重視していたのは点数。まさに「目的地」だった。現在地を曖昧にしていた私は、いくら勉強時間を確保しても、自分は理解できているのかという不安が四六時中頭から離れなかった。このことから、基盤が安定していない状態で、ただ猪突猛進に進めるだけでは、物事の目的も、自分自身も見失うことをこの部分を読んで痛感した。

慎は、新たな人と出会い、新たな価値観を得て、自分を振り返ったことで、現在地の大切さに気づくことができた。つまり、人と出会い、価値観を広げることによって人生のヒントを得られることがあるのだ。作中ではこのような言葉もある。

「くやし涙が出てるときって、でっかくなってる最中なんだからな」

私も悔し涙を出してしまうことはよくあるが、それは「自分が情けない」「もっと頑張れば良かった」という後悔からくるものだ。しかしこの言葉を読み、その涙が出るということは頑張ってきた自分がいたということであり、いったん自分を褒めることが大切だと考えられるようになった。次に私が悔し涙を流す時、きっとそれを糧に前に進むことができると思う。

私はこの本から、現在地を知ることの大切さ、価値観を広げることの大切さを学んだ。今回のように、人生のヒントは人との出会いだけではなく、本との出会いの中にもある。神社の猫が運んでくれたお告げのように、ターニングポイントとなるきっかけは人生には何回もあるだろう。しかし、それを自分のものにできるかは自分次第だ。

私は、全日制高校から通信制高校に転入した。だが電車内で、通学している高校生を見かけると、この選択は正しかったのかと自問自答することが今まで何度もあった。しかし、この本を読み終えてこの選択をしてよかったと心から思えるようになりたいと強く思う。不思議に、今の私なら失敗を恐れずに自分のすべきことを自ら行動できるような気がする。「自分のものにするかは自分次第」この言葉を心に刻み何事にもチャレンジ精神を持って取り組んでいきたい。

図書名 猫のお告げは樹の下で
著者名 青山 美智子

優秀賞

目に見えないところを磨く

杉山 浩二

「目に見えないところを磨く」この言葉が心に残った。教師として、子どもたちに掃除を通して心を磨いて成長してほしいとこの本を読んで強く思った。

掃除を通して、荒れた学校が生まれ変わる。非行少年や罪を犯した青年が人生をやり直す。読んでいて本当に「奇跡」だと思った。

私は、学校で、清掃担当の責任者として力を尽している。この本を何度も読んだが、読む度に、掃除の持つ力を知識として知り、それを知識として終わらせるのではなく、実践に移そうとする原動力になっている。自分の生き方に力をいただいている感覚である。

教室の掃除は言うまでもなく、廊下の窓の掃除、校庭の雑草抜きや側溝の掃除、トイレ掃除等、学校には、多くの掃除をする必要がある場所があることに気づくことができた。本にあるように、そのことに気づいたその時から、掃除することを心がけ、今に至っている。いつも自分の机やロッカーに、掃除道具を準備している。

子どもたちに掃除を指導するなら、まず自分が率先して掃除に力を入れようと、本を読んで以来、掃除を続けている。一日5分の時もあるが、「継続は力なり」の言葉通り、続けることに意味があると思い取り組んでいる。夏休み等の長期休みには、トイレ掃除等、普段目の届かない所の掃除に取り組んでいる。夏は特に、着ている衣服が汗でびっしょりになる。しかし、そのことで、掃除した場所がきれいになり、他の人が気持ちよく過ごすことができると思うと、汗は勲章のように思うことができるようになった。

本に指摘があるように、今の日本に欠けているのは「他者への配慮、思いやり」だ。ものすごく共感できる。日本は以前「他者への配慮、思いやり」に関しては、世界屈指の高い水準にあった国だと思う。しかし、現在、その水準は、かなりの程度、低いものに変化してしまったように感じる。日本人の一人として、大変悲しい気持ちになる。大事なことを失ってしまった。教

育がその責任の一端を担ってしまったというのなら、教師である私にも責任があると思っている。それ故に、今、掃除に重きを置き、学校で実践している。一度失ったものを取り戻すには、大変なパワーがいる。おそらく、力を入れて取り組んだとしても10年はかかるだろう。日本が長い歴史で築いてきた美しさを取り戻したい気持ちでいっぱいである。学校現場で、掃除指導を子どもたちに力を入れてすることで、よい方向にベクトルを向けることができると思う。未来を担うのは、成長していく子どもたちだからだ。

掃除の持つ5つの力―①謙虚な人になれる②気づく人になれる③感動の心を育む④感謝の心が芽生える⑤心を磨く―が紹介されているが、私自身も掃除に真剣に取り組み始めてからこの5つを実感している。特に、「謙虚さ」については、大きな影響、変化を与えられた。一人の教師として、子どもたち、先生、保護者、地域の人達に対して傲慢な自分であったことに気づき、改めることができたと思う。まだまだ、謙虚さは足りないかもしれない。しかし、これからも掃除の実践を通して努力することで、成長し、謙虚さを身につけたいと思う。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」の言葉通り、教師として成長していき、関わる人達により影響を与えることができるようになりたいと強く思う。

「掃除に学ぶ会」に実際に参加し、中学生とトイレ掃除に取り組んだ時、一緒にグループにいた中学生が、真剣に取り組む姿を受け、大変刺激を受けた。掃除終了後、一緒に昼食を食べたが、その中学生の表情が大変明るく、美しかったことを覚えている。初対面の中学生とフラットに話すことができ、大変心が和らいだ。そして、トイレ掃除が、彼の心の成長に与えた影響は大きく、有意義だと実感することができた。彼の目にみえないところが磨かれたのだと思うと、今も忘れられない出来事だ。

この本を読んで、自分の人生が変わった感覚がある。「掃除」にはそれほど大きな力があるのかということを知ったことだ。それも実践を重ねていくことで人生が好転していくことに気づくことができた。掃除した場所がきれいになるだけでなく、自分の心が磨かれるということに感動の心を持つことができるようになった。そして、自分は教師として子どもたちに、掃除に真剣に取り組むことの素晴らしさを伝えることができる立場に幸運にもいる。

それを自分の運命として受け入れ、掃除に取り組んでいきたいと思う。

一度だけ、著者の鍵山秀三郎さんとお会いさせていただいたことがある。自分の人生をよい方向に導いてくださった人の顔を忘れることができない。「一冊の本が人の人生を変えることがある」ということを、身を以て感じている。これからもこの本に出会うことができたことに感謝の気持ちを持ち、折りにふれて読み続けていきたいと思うのだ。

図書名 掃除が起こした「奇跡の力」
著者名 鍵山 秀三郎

優秀賞

ただ一人だけ

須川 ゆき子

この本は紫波町図書館の郷土史コーナーにある。サイズは、厚さ一センチで片手に載るほどの小ささだけれど、長之助の生涯について細かく丁寧に書かれている。私はこの本を何度手にとっただろう。紫波町図書館に行くたびに郷土史コーナーに立ち寄ることが習慣となった。

須川長之助。植物採集家であり紫波町名誉町民であり、何よりもロシア人植物学者、東亜植物学の父といわれたマキシモービッチ氏からその人柄で絶大な信頼を得、主従関係以上の絆を築いた。

須川長之助物語は井上幸三氏によって昭和四十六年に発行されている。

長之助の生い立ちから全国各地にまたがった採集行、信仰について、現存する資料に基づいて詳細に書かれている。マキシモービッチ氏についても然り。

植物学者としてアカデミー正会員となり最高の栄誉に輝いたマキシモービッチ氏。世界の最高権威として内外の信望を集めながらも流行性感冒から肺炎を併発し六十四歳で昇天する。つぶさに読んでいるとはるか遠い百年以上も前の世界に吸い込まれるようである。

この本を初めて読んだのはNHKの連続テレビ小説「らんまん」が放送された時。植物学者牧野富太郎をモデルとしたこのドラマの中でロシアの植物学者、マキシモービッチ氏の名前が連呼された。それならば、もしかして長之助が登場するのではないか。演じるのは誰だろう。わくわくするとともに、小学校の時、長之助について学び、それを劇にし、学芸会で発表したこと、花好きな知人から「長之助草って花があるけど、須川さん、長之助の末裔なの?」と聞かれたこと、中学校の時の先生が長之助はロシア正教の信者でお墓に十字架が刻まれていると教えてくれたことなど、あれこれが頭の中に浮かび、長之助についてもっと詳しく知りたいと思ったからだ。

この本の中で特に心に残る箇所がある。それは船酔いを心配した長之助に長崎行きの同行を断られたマキシモービッチ氏が、函館在住のあるロシア人

に自分のしもべを同行させると提案された際、他の人はいらぬ、長之助は日本に「ただ一人だけ」と断る場面。それを聞いた長之助は自分の不明を詫びて長崎行きを承諾する。以後、マキシモービッチ氏が帰国した後も今日のような詳しい地図もない、気象情報もないなか、植物を採集し採集年月日、場所ごとに丁寧に揃えてロシアに送っている。が、長之助は明治二十四年、マキシモービッチ氏が亡くなった際、その訃報に接し、地に伏して号泣し、それ以来ぶつくり植物採集を止めてしまう。その力量から他の学者の下で採集を続けることも出来たでしょうが、長之助にとってもマキシモービッチ氏は「ただ一人だけ」の師だったのでしょう。

「ただ一人だけ」私はこんなにも誰かに信頼される生き方をしているだろうか。体に不具合が起きた時、予定が上手く進まなかった時、物忘れが多くなった時、自分だけが世の中から取り残されたようで投げやりになる。私は反省の意味を込めて読む度にこの文面を指でなぞってしまう。また、長之助は信仰を捨てなかった。明治維新の頃、信仰の自由に理解がない時代に村中ただ一人のキリシタンとして周りから磔だ、奇人だなどと噂されてもマキシモービッチ氏に導かれたであろうロシア正教を生涯貫き通した。そして、故郷も捨てなかった。ロシアの間諜だと心にもない罵声を浴びせかけられ、村八分にされながらも農作業や行事の度に結いの精神を忘れずに地元尽くした。私だったらこうはいかないなと感嘆のため息が出る。

それにしても、著者、井上幸三氏の緻密さには頭が下がる。長之助の植物採集の際の宿泊控、雑費控、宿泊控だけでなく、日本博物学年表、満州植物研究誌など多くの作品を参考文献として読み砕き長之助の人生に光を当てている。

調べてみると井上氏は岩手県立中学校、高等学校の教師を退職してから岩手植物の会の会長、顧問を歴任している。実際に長之助が採集した函館、横浜、長崎なども歴訪し、また、函館ハリストス正教会の指導助言を受ける等、充分史実に則った作品として完成させながらもあとがきで、「心残りとしてソ連科学アカデミーから送られたマキシモービッチの箱館日記が磨滅不鮮明な部分があり解読困難であるため目下ドイツに照会中であるため今回掲載されなかったこと」と記載している。いかに貪欲に長之助の生涯と向

き合っていたか、感服するばかりだ。

結局、NHKのドラマ「らんまん」に長之助が登場することはなかったし、私が末裔ということもないのだけれど、長之助の生きた証は私の心の糧となり、これからも道標であり続けると思う。

この本が発行されてよかった。この本に会えてよかった。長之助の地道に実直にたとえ迫害されようと腐ることなく生きた道のりにこれからも触れることができる。私は愛おしさで感謝で温かい気持ちになって丁寧に本の裏表に手のひらを合わせてまた書棚に返す。

図書名 須川長之助物語
著者名 井上 幸三



入 選

私の隣に在った、音のない喧しい世界を知って

千葉県立千葉女子高等学校 1年 高地 春香

「CODA」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。「CODA」とはChildren Of Deaf Adultsの頭文字を取った言葉で、生まれたときから両親が聾者で、物心ついた時から親の生活をサポートしなければならない子どもたちのことを表しています。

この作品の主人公「ぼく」もまたCODAであり、両親がともに聾者で、幼い頃から両親の耳の代わりをしてきました。そんな生活の中で、耳の聞こえない両親との確執や社会の冷たい視線について描かれています。

本当はとても大切に思っている母親を、障害を原因とした生活の困難さや思春期の不安定さから、疎ましく感じて心無い言葉をぶつけて傷つけ、逃げるようにして上京して一人の生活を始めます。

両親と離れ、一人で生活するようになってからは、今まで伝えることのできなかった両親への感謝を素直に伝えることができました。それだけでなく、CODAや聾者を取り囲む現実を社会に発信したいという思いが強くなり、ライターとして努力する中で一人の人として成長していくという姿に大きな魅力を感じました。

私はこの本との出会いを通してCODAという言葉を知りました。幼い子どもにとって本来親は自分を守ってくれる存在です。しかし、主人公の家庭は違っていました。小学生の時から、生活を成り立たせるために、親のサポートをし続けなければなりませんでした。そうやって生活することは大きな制限と負担となり、友達と遊ぶことや楽しく会話するという時間もなく、大切な出会いやつながりを得られないまま成長しなければならないということだと感じました。それは子どもたちの人格の形成に多大な影響を与えることだとも思いました。甘えることもできないのに、世の中の他の大人からは「えらいね」と言われ、自分の本当の気持ちが分からなくなっていく状況は、誰にも頼ることができない、自分がなんとかするしかないという孤独を一層強めていったに違いありません。両親を大切に守りたいという気持ちと、素直

に甘えたいという心理が複雑に絡み合い、健常者や私のようにごく普通の家庭に生まれた人には分からない苦悩があることを知りました。

調べてみると、日本にはCODAと呼ばれる立場の人が約二十万人もいるそうです。知るということは、相手を思いやる第一歩だと私は考えています。この作品に出会って、障害のある方とその家族の現実になんか触れることができ、自分自身の見方や認識が変化したと思っています。障害があるという事実もそれを受け入れもがく状況も、本人が望んだものではありません。普通の人と異なる生活をしている人を「異質なもの」として見ることは間違っていると感じましたし、そもそも「普通の人」、「普通の人生」とは何かとても深く考えさせられた内容でした。

この本を読んでさらに考えさせられたことは、支えられている側にも大きな苦悩や葛藤があるということです。作品全体を通して、母親は息子である主人公の行動を静かに見守っています。幼く未熟な息子が、聾者である母親の存在を隠すために外では手話を使わなかったり、学校の行事に参加させないようにしたりしていました。しかし、息子の思いを理解している母親はいつも「ごめんね」と言っていて、息子の心が追い詰められないように配慮していました。主人公は成長して大人になってから、そのような態度をとり続けたことをとても後悔していました。そして、聞こえないことが分かっているにも、精一杯の言葉で謝りました。その言葉を受けて、母親は「あなたの気持ちはわかっていたから気にしないでいいのよ」と答えます。私にとってこの場面が最も印象深く、障害を越えて互いが愛情でつながっていることを実感できた瞬間でした。冷たい態度で接していた時も、本当の愛情で互いにつながっていたから、心の奥にある真実の愛情を信じていることができたのだと思います。その後、上京して色々な境遇の人と出会い、自分の境遇が特別ではなく、同じ苦しみや同じ思いと向き合っている人が多くいることを知って、次第に癒されていきます。いろいろな人と良い関係を築くことができたのも、主人公自身が多くの苦しさを経験し、それを親子の愛情を確かめることで乗り越えた経緯があったからだと思います。

作品を読み終えた時、自分のこれからについても考えました。高校一年生の私ですが、今でも時折両親に反発したり、衝突したりすることもあります。

私自身もいつか素直に感謝を伝えられて、分かりあえる日が来るのだろうか
と不安に思っていました。この作品から勇気と希望を与えてもらった気が
します。そして、たとえ言葉や音で伝わらなくても、相手の心にちゃんと届
く思いがあることを知ることができました。

図書名 ぼくが生きてる、ふたつの世界
著者名 五十嵐 大

入 選

フィクションが意味するもの

宮城県泉館山高等学校 2年 堀江 美結

いつから家にあったのかはわからないが、初めてこの本の存在に気がついたのは中学生のとき。ちょうど受験勉強に本腰を入れ始めたころだった。当時の私は息抜きにと、当書をいい加減に流し読んだ。読み切ったことに勝手に満足し、またすぐに勉強に戻ったのだ。改めて当書を吟味した今、この物語の意味を考察することもなく、単なるフィクション小説として片付けたあときの自分を、極めて残念に思う。

ナチ時代、とある一家がドイツ領の閑静な地に越してきた。その中には子どももいた。ナチス将校を父に持つ、探求心に富んだ男の子だ。彼は好奇心が抑えられず、ある日、近づくことを固く禁じられた、ユダヤ人収容所へと足を運んでしまう。大勢が抑留されたその場所で、彼は一人の少年と言葉を交わす。あろうことか、二人はフェンス越しに友情を育んでいくのだ。

当書を読む上で重要になってくるのは、この物語がフィクションである、という点だと思う。物語中、二人の少年がフェンスを持ち上げてくぐり、障壁なしで会うという場面がある。ただし、当時は収容所のフェンスに電流が流されていたらしい。現実ならば二人は持ち上げるどころか、フェンスに触れただけで命を落としてしまっていたようだ。ではなぜ作者はこの物語を書き、二人の心を通わせたのか。再読し終えたとき、ふとこの疑問が頭をよぎった。そしてその答えを見つける鍵こそが、二人を隔てていたこのフェンスなのだと、漠然と感じた。思うにこのフェンスは、見えずとも確かに存在している心の壁、すなわち差別を表しているのではないか。二人の少年の間には人種という違いがあったが、それでも彼らはそれに囚われず、良好な関係を築き上げた。フェンスをわざわざ二人に協力させてくぐらせたのは、彼らが人種の壁を乗り越えたことを暗に示すためなのだと解釈した。これを考えたととき、決して他人事ではないことに気づき、はっとした。今はナチ時代ではない。偏った教育や報道も大幅に減ったはずだ。それでも差別は続いている。さらに情報の発信が容易くなった現代では、今まで見えなかったさまざま

まな差別も表面化してきている。これらに目をつむり、知らない顔をして過ごすのは簡単だと思う。しかし、それでは一向に差別はなくならない。たとえ大きな違いがあったとしても、その違いを恐れず、二人の少年のように協力し認め合うことで、壁のない社会をつくることができると、そう訴えかけられたように感じた。

また、この物語を読み解くための鍵は、フェンス以外にも隠されているように思う。たとえば越してきた男の子は、探求心はあるものの、全くの無知だった。彼は当時の常識だった、ユダヤ人差別の思想を知らなかった。そのためユダヤ人が受けた迫害の数々を知らず、收容された人々の苦しみを理解することができなかった。ただ縞模様のパジャマを着た人たちが楽しく暮らしていると、お門違いな妄想をするばかりだったのだ。物語内ではこの無知さがプラスに転がり、ユダヤ人の少年に対して差別意識を持たずに接することができていた。しかし物を知らないゆえの無神経さは、確かに目立っていたと思う。だからといって、もし彼が世論や常識を理解していたなら、ユダヤ人を軽蔑し、收容所に近づこうだなんて考えもしなかっただろう。これに気づいたとき、流れてくるあまたの情報を、自分がいかに疑わず受け入れてきたのかに目を開かされた。万が一私が偏向教育を受けていたなら、盲信し、差別をしていたに違いない。今でも間違い偏った情報を目にするのが少なからずある。そのような根拠のないものに踊らされてばかりでは、結局は無知であるのと大差なく、人を傷つけかねないのだと身に染みて理解した。

初めてこの本を開いたとき、私はこれがフィクションであることについて、何の疑問も抱かなかった。しかし今となっては、もっと早くに作者の意図を考えるべきだったと後悔している。私は差別をせず、壁を乗り越えるために、まず公平に物を見るよう意識して生活するようになった。また、授業しかり、ニュースしかり、情報をただ鵜呑みにするのではなく、自分の頭で考え判断することに重きを置くようになった。その結果、自分でも知らないうちに、人を分け隔てるような考え方をしていたことに気づいた。差別の存在を身近なものとして認識することができたのだ。ただ、これは私の解釈に基づく私の変化である。当書から何を学び、何を得るのかは人それぞれだろう。だからぜひ、自分で読み、自分で解釈して、それを日々の生活に活かしてほしい。

特に差別を自分とは無関係だと考えている人にとって、当書がそれを考え直すきっかけになればと切に願う。

図書名 縞模様のパジャマの少年
著者名 作…シヨン・ボイン
訳…千葉 茂樹